

talk! talk! talk! 芸人・木村祐一さん



芸人 木村祐一さん

キム兄やんこと木村祐一さん。
芸人として活躍する彼は独自の視点と鋭い感性を持ち、お笑い界でも偉才を放つ存在である。そんな木村さんがライフワークとして続けているのが「写術」。自分が普通じゃないと感じたものを写真に撮り、それを独自の弁論でももしろく説く術である。
“写真と笑い”を一体どのように融合させるのか？
その術にせまるべく、今回は「写術」についてじっくりと話をうかがった。

プロフィール

きむら・ゆういち。1963年、京都府生まれ。ホテルマン、染色職人などを経て23歳でデビュー。お笑い芸人として多方面で活躍中。人呼んでキムキム兄やん。
人とは違った視点でいろいろな事象を斬る吉本唯一の随想家と呼ばれ、ライフワークとしている「写術」では独特の手法で奇才ぶりを見せている。キム兄やんの愛称で、多くの芸人の兄貴的存在として信頼も厚い。趣味は写真撮影の他にも料理など。2月には自身の著書「木村料理道 THE NABEキム'Sスタイル」(実業之日本社)を刊行している。ルミネtheよしもとにて毎月1回ライブ「元クラウディーズ」開催。近くでは12月5日と1月22日。

「写術」とは？

自分が普通じゃないと感じたものを写真に撮り、それを独自の弁論でももしろく説く術のこと。木村さんは写術師として毎年この形式のライブを行っており、今や写術は彼のライフワークとなっている。人とは違った視点で語るその話術に笑ったり、ときにはうなずいたり、その才能を存分に堪能できるライブだ。ちなみに、木村さんオススメの撮影場所はJR沿線。特に大久保付近や中央線が面白いとか。写術にチャレンジしたい方は散策してみるといいかも!?

写真を撮り始めたきっかけは マンションの1階の内科医だった

写真はいつ頃から撮っていたのですか？

カメラで初めて撮ったのは小学生の頃ですね。機関車を撮ってたんです。10歳ぐらいまでSLが走ってたんですよ、山陰線に。しょっちゅう出かけてね、毎週末におやじの一眼レフカメラを借りて撮りに行きました。

最初から一眼レフカメラで。

そうなんです。しかもオートではなかったですからね。もちろんシャッター速度とか絞りがどうか技術的なことはなにもわからないから失敗もありましたよ。逆光とかいうのはあかんのやるうとか、それぐらいで。でもフィルムを自分で入れたりプリント合わせたりっていう喜びはありましたね。

SLがお好きだったんですね。

その時期だけやったんですけどね、そのときはほんま好きでした。1枚、SLをちょっと後ろから煽るような感じで、向こうむきの、石油タンクメインの写真撮ったことがあったんですけど、それはもの凄いわめられた嬉しかった思い出がありますね。構図が素晴らしいと言われて。でもカメラはそれから最近までずっとやってなかったんですよ。子供の頃は野球やったりとか切手集めたりだとかいろいろ趣味がありましたしね。おやじがカメラを持っていたんで興味はありましたし、ずっと身近にあったものだなって認識ぐらいで。

また写真を撮り始めたのは写術を始めてからですか？

そうです。僕11年前に東京に引っ越してきたんですけど、そのときに1人で何か記念のイベントをやろうみたいなことになったんです。出し物として1人しゃべりとか1人コントとかではなくて、何か違うものがやりたいなと考えてたんです。ちょうどそのとき住んでたマンションの1階が内科のお医者さんだったんです。だからちょっとした駐車場があったんですけど、患者用のですから住人が止めたらダメなんですよ。で、ポストのところのところに貼り紙がしてあったんですよ。「無断駐車は注射します」って書いてある。

(笑)

まあ、古いシャレなんですけど、医者やからしゃあないかって。それを写真に撮ったら、これは発表すべきだみたいになってきて、それがまた写真を撮り始めた一番最初ですね。

記念すべき写術の1枚目でもあったんですね。

そうですね。でもそのときはまだ全然、今の写術の形ではなくてイベントの中の20分ぐらいのコーナーで、写真も10枚、20枚見せて終わり、みたいな軽い感じで。

ただ、「注射」を見つけてから道を歩いててもなんか気になるというか、見えてくるようになったんですね。向かいの家の駐車場部分がほんのちょっと高くなって、この段差の意味はなんやねんとか、横書きで2列に田中と中村って書いてある表札があって、上から読んでも中村と田中になる、とか。そんなんを写真に撮りためだして、もっと見せたい、お客さんももっと見たいってことになって、そのコーナーがだんだん膨らんで写術になったんですね。

写術を通して街を歩けば 裏の裏が見えてくる

写術を拝見していると、本当になんでもない風景を笑いにしちゃったり、普通に歩いていたら絶対気づかないようなところに気づけるという感性はさすがだなと思いました。

普段から周り見てつっこみながら歩いているんで、それをそのままやってるだけなんですけどね。僕はこんなん思いますねって。まあたしかに普通に歩いてたら気づかないことですよ。もっとよく見なさいというわけではないんですけど、もっとこんなふうに見たら面白いんじゃないかっていう提案ではあると思います。



1枚でシンプルに笑わせるものもあれば、けっこう長くコメントをつけるものもありますよね。

見た目ですぐわかるものはそのまま笑わせますが、最近はその裏を考えるようになったんですよ。最初はなんでこんなことなってるんって怒りとか、疑問とか、納得いかないことをつっこんでたんですけどね、逆につっこまれる側の事情というか、裏側を考えるようになって、それをまたしゃべったりするんです。

裏側？

たとえば、大通り沿いに建築中の家があったんですけど見ると玄関が横向いてるんです。車の排気ガスやらなんやらでそうしたんでしょうけど、すごく見た目が悪くて変なんです。それでもこうしたのは、現代交通社会にそっぽ向いたというメッセージなのか？と。前はそれだけだったんです。でも今はさらにつっこんで、実はこの主人は本当は見栄えよく通りに向かって玄関を建てたかったんちゃうかと。ところが大工が「いやいや、ご主人これでは玄関汚れまっせ」と説得されて泣く泣くこうしたのかもわからん。ってなことを付け加えるようになったんです。

別にその家の主人に対する思いやりとかではなくてですね、1枚でいっぱいしゃべりたいっていうふうになったんですよ。そうなったときに、結局勝手な解釈なんですけど物事の表と裏を自然に考えるようになりましたね。

こうなっているのには、こんな事情があるんだぞと。

そうですね。店の看板にしてもペンキの塗り方にしても、自分でよくよく考えてやってはるんだらうとか、ここは完璧に業者まかせでやってるなどか。それが本当にそうなのかは知らないですよ。でも、何でもそうやって考えてきましたから、今はなんとなくわかる感じはしますね。

たくさん見てきているからこそ気づくようになったこともあるんですね。

いろいろ歩き回って気づいたりね。店の暖簾とか玄関マットとか既製品のものを見ると、このあたりの地域の店は同じタイプのものを使ってるから、この業者の営業さんががんばったんやなとか。でも1軒だけ違うのがあったりするんです。そういうのを見ると、努力をしても、みんなが同じになるっていうのは難しいことなんだなって思ったり。人気者だって言われてても、全員が好きなのではないし、でももちろんなってもらいたいと思うし、こういう地元の商売と一緒にがんばらなあかんねんあと思えますよ。

写術では「こんな狭い地域なんやからいさぎよく統一せえよ」みたいに言って笑いにするんですけど、そうやって考えさせられることもあります。

ニコンWEB版「写術」披露

では、持って来て頂いた写真の解説をお願いいたします。

はい。では1枚目。これはただの車自慢なんですけど、プジョー306ですね。これ買って車屋が持って来たときに左後ろの洗濯機にいきなり当ててしまったんですよ。ショックでしたね。何回も入れ直しさせました。

(笑) 修理はしてもらったんですか？

してないです、そんなへこんだりはしていないんで。あんまりそういうところに過敏ではないんですよ。この車ではないんですけど、前にも当てられたことがあって、そんときも別にもうええわって言ったんですよ。相手は「こちらが100%悪いのにですかー」って言ってましたね。右の自転車のハンドルにかけてるのはくつしたですね。ここに洗濯機があるんで窓から洗濯物入れたり出したりするのでたまにポローンて落ちるんですよ。で、下にべちゃーてなって、これはそのままハンドルに干してある。

次の写真は。

これはゴミ捨て場にカラスが来るからこういう貼り紙をしているんですよ。なのにカラスがお願いしているのはどうなんだと。どういことなんやと。カラスはゴミが無くなったら困るはずなんです。なのにカラスがお願いしているっちゃうのは、ほんまはカラスもゴミを荒らしたくはないんだという考えなのか。「ケイレイ！」「オネガイシマース」って。メスとオスに分かれてるものなんか腹立ちますね。なに性別分けとんねんと。

では最後の写真を。

一見普通なんですけど、よく見ると真ん中あたりに1個あまってるんですよ。これどういう事なんでしょうね。こっから縦にチェーン張るのもバランスが変ですし。これ、なにあまっとんねん、という感じですね。



写術は「楽譜に写真を並べてその楽曲を演奏している感じ」

写真は普段からカメラを持ち歩いて撮っているんですか？

いや、持ち歩いてはいいです。歩いて、「あっ」で思ったときにメモしておいて、次のイベントの前にまとめて撮りに行く感じです。

年に1度やってるんですけど、毎回5、600枚ぐらい写真はたまりますよ。で、撮っていくうちに必ず1枚、基準になる写真が出て来るんですよ。それさえあったらOKっていうのが。必ずしもその写真がウケるわけではないんですけど、自分の中でそれが今回のテーマみたいになるんです。

見せる写真の順番などもそれで決まるのですか？

順番は決まってないですね。舞台上で適当に並べ替えて見せたりしてますから。途中でちょっとテンポアップしたいなってときにシリーズものを並べてみたり、昔のをひっぱってきて入れたり、その場の感じで。

それはお客さんの反応によって替えるんですか？

いや、お客さんの反応もありますけど、基本的には自分の気持ちですね。かなりの枚数を見せるので、1枚1枚より1セットごとにやる感覚なんです。写術はね、1枚の楽譜があって、そこに写真を並べてその曲を演奏するイメージなんです。ここはアップテンポに、次は静かなとこ、ここでサビをもってこようみたいな感じ。

さっき言った基準になる1枚っていうのが楽曲全体のイメージなんですね。で、ある程度なんですけど主旋律みたいなものを決めて、何楽章かあって、あとはそれをどう組み合わせるかっていうのは舞台上でやる。

でも、自信作がまったくウケなかったり、意外なものがウケることもあるんですよ。

それはありますね。でも別に悲しいとか腹立たしいとかはないですよ。あ、そういうのが好きなんやって思うぐらいで。まあ写術の場合は自分の客ですからね。少々大人しいお客さんでも淡々とやりますよ。

大人しいお客さんが多いのですか？

そんなこともないんですけど、あんまりキャアキャア言う感じのお客さんではないですね。だって終わってから、楽屋口でだれも待ってないですもん。出し物に興味があって個人に興味がない、そういうお客さんだからいいですよ。

写術師、木村祐一 これからも写術の道を行く

写術で今後、目指しているもの、やってみたいことはありますか？

まだまだ撮り残した地域が都内でもあるので、そういう所を回って撮りたいです。地域によって雰囲気も全然違うし、海外でもいつか撮ってみたいですね。僕が見て面白いことも、向こうではあたりまえだったりするのかもしれないし、そのへんの所もどうなるのかやってみたいですね。

これからも写術はライフワークとして続けていくんですね。

そうですね。写術はもうすぐ10年になるんですよ。だからなにかひとつできたらいいですね。今年は六本木ヴェルファーレでやらせてもらったんですけど、場所的にもね、武者震いのなものが得られました。次はホテルとかで写術ディナーショーとかね。食器カチャカチャ言わせながら（笑）。

やっぱり舞台が好きなんですネ。

それはもう、自分の言いたい事を言えるわけですから、テレビでクイズ答えてるのは違いますよ。テレビも楽しいですけど、あれは呼ばれてる感じなんですネ。だからクイズ番組で100万円獲るよりも舞台で写真1枚紹介するほうが楽しい。

やっぱり芸を見せる場というのは舞台？

そうですね。舞台の上が一番素の自分を見せられるし、楽しいし。我々芸人というのは常に新しくソフトを作って持ってないとダメですよ。それを発表させてくれるハードの部分を会社が与えてくれるわけですから、多くのソフトを持ってる方が得なんです。特に、テレビよりも舞台、生のお客さんに対応できるものをどれだけ持っているかってことが大事ですね。テレビは放送されたらおしまいですし、どう思われてるのかりアルにわからないからそればかりだと自分を見失ってしまうんですよ。そういう意味でも舞台は続けていたいし、舞台で耐えられるものを作り続けていかないと、ということでしょうね。

たとえば、若い芸人さんが木村さんのようにカメラを使って舞台をやるのもいいんですか？

やってもいいと思いますよ。ただ、今はキム兄とかぶるからって誰もやれないんじゃないですかね。でもかぶるとかじゃなくて、カメラを使った芸として確立してやればいいんですよ。ダウンタウンの松本さんだって自分で撮った写真ではないけど、一言コメント付けてライブやってたりしてますから、写真と笑いというのはありなんですよ。

写術という、新たな笑いのジャンルができるかもしれないですね。

そうですね。僕はもう写術師として名乗ってますけど、2代目写術師を名乗る奴がいてもいいでしょう。弟子になるとかなくていいですよ、僕も僕もって名乗って写真始めたらいいと思いますよ。そうなればね、きっとカメラ業界としても喜ばしいことなんじゃないですかね（笑）？



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.